

インド哲学仏教学

◇教員◇

教授：蓑輪 顕量

准教授：高橋 晃一、加藤 隆宏、八尾 史 助教：崔 境眞

◇学生◇

学部：8名、修士課程：5名、博士課程：14名（大学院学生数は、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野としての総数）

インドの思想文化は、3000年にわたる長い歴史を通じて、きわめて多様な哲学的・宗教的な文化・文献を蓄積し、その豊かさと奥深さをもって、アジアはもちろん、西欧の人びとをも魅了しつづけてきた。なかでも、インドからアジア各地に広まった仏教は、東南アジア、東アジア、さらにチベットにおいて、今日も力強い生命を保ち、多くの人々の生きる指針となっている。洋の東西の知を架橋する、この思想文化に触れることは、現代の人びとが直面する諸問題に、新鮮で貴重な知見を与えてくれる。

インド哲学仏教学専修課程（略称：印哲あるいは印哲仏）は、こうしたインドの思想文化と、インドに起源をもちアジアの諸地域に展開した仏教の思想文化の、教育と研究を目的とする。その研究対象は、インドの古代から近代の思想文化に及び、仏教に関しては、インドはもちろん、他のアジア諸地域（東南アジア・東アジア・チベット）にまでわたる。きわめて広い研究領域をもつことは、本専修課程の特徴であり、大きな魅力の一つである。

インド思想ならびに仏教は長い歴史を持ち、広大な諸地域へと多様な展開をとげてきたので、その研究方法は多様であり、歴史学、考古学、人類学あるいは比較思想など、さまざまな切り込みが可能である。ただ、いずれの方法を取るにしても、それらに共通する基礎となるのは、文献の研究である。長大な歴史を通じて、人びとはつねに伝承された文献にみずからの現在を照らし、その理解をふたたび文献へと映し出していった。本専修課程では、思想の過程が深く刻まれた原典の解説に重点を置き、その基礎力の養成を目標とする。一見、迂遠とも思われるこの道筋は、その後のさまざまな研究の可能性を開く、最も確実なアプローチである。

奥ゆきの深い原典を読みこなすためには、語学力と思索力の双方が必要となる。インド思想や仏教思想は、諸言語のなかで最も完成度の高い言語と見なされるサンスクリット語によって、その主要な原典が記されている。言語の完成度は思想の完成度に連動しており、中国や日本の仏教も、サンスクリット語によって思想の原型がかたちづけられている。原典の解説を通し、洋の東西の知の底流にある思想を解明することは、現代の諸問題をとらえるうえでの確固たる基盤の形成につながる。本専修課程がサンスクリット語の学習を尊重する所以である。

本専修課程に進学を希望する学生は、教養課程で哲学的なものの考え方に習熟するとともに、あわせて諸外国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語など）に積極的に挑んできてほしい。サンスクリット語文法は本郷でも開講されているが、駒場で学んでいけば、それだけ早く原典に向きあい、より深い世界を味わうことができるようになるだろう。

本専修課程は、起源を明治 43 年（1910 年）に遡り、百年を超える歴史をもつ。この間、常に新しい問題意識に立って伝統を刷新しながら、日本の、ひいては世界の学界・思想界に大きな貢献をなしてきた。専修課程の名称として、長い間、創設当時の「印度哲学」を用いてきたが、平成 6 年（1994 年）より、専修課程の内容をより見えやすくする目的で、「インド哲学仏教学」に改められた。

ここで本専修課程の専任教員とその専門、及び講義の内容を紹介しよう。菘輪教授は東アジアの仏教、主に日本仏教を担当する。その主たる領域は日本の中世の時代にあり、交衆と遁世門という二つに区分される僧侶の日常の営みに配慮しながら、彼らの残した資料から思想的な解明を進めている。昨今では心を見つめる止観の伝統にも関心を持って研究を進めており、内閣府のムーンショット 9 にも参画している。2022 年度は院政期の資料である『安養集』や鎌倉時代の凝然の『華嚴法界義鏡』の輪読を進めた。寺院に残る写本資料などが扱えるようになるとともに、思想的な展開が理解できるようになることを目指している。また 2023 年度も比較文化的な視点から仏教を捉える比較仏教論に取り組む。

高橋准教授はインド仏教（論書）を担当する。その主たる研究領域は大乗仏教の瑜伽行派の思想で、特に唯識思想の成立過程の解明を進めている。主著『『菩薩地』「真実義品」から「撰決択分中菩薩地」への思想展開』のほか、

『唯識と瑜伽行（シリーズ大乘仏教7）』では「初期瑜伽行派」の章を担当している。また、2021年3月には『『阿毘達磨集論』の伝承：インドからチベットへ、そして過去から未来へ』を出版した。2022年度は、演習では瑜伽行唯識派の基本文献である『中辺分別論』のサンスクリット原典を講読したほか、唯識思想以前の瑜伽行派の思想を伝える文献である『菩薩地』の輪読を行った。さらに、駒場では専修課程へ進学を控えた学生向けに、インド哲学概論の講義を行い、インド哲学文献の原典和訳を参照しながら、インド思想を理解するための基礎的な概念について解説した。

加藤准教授はインド哲学（仏教以外）を担当する。その主たる研究領域はヴェーダーンタ派の思想で、同派において聖典とされるウパニシャッド文献、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対する註釈文献などの分析を通じて、現代にまで脈々と受け継がれるヴェーダーンタ思想の展開について研究を進めている。2022年度は、講義では3000年におよぶインド思想を通時的に概観する「インド哲学史概説」を担当した。また、演習（前半）では、ニヤーヤ学派の根本経典『ニヤーヤ・スートラ』とその註釈『ニヤーヤ・バーシュヤ』を読み、論理学派の基本教説について解説した。演習（後半）では、サーンキヤ学派の根本経典『サーンキヤ・カーリカー』とガウダパーダによる註釈『ガウダパーダ註解』などを読み、サーンキヤ学派の基本教説について学んだ。また、註釈文献の取扱い方などについても解説した。その他、2023年度も引き続き「サンスクリット語初級」（後期、駒場）を担当する。

八尾准教授はインド仏教（経・律）を担当する。仏教出家者集団の生活規則を集成した聖典「律蔵」を主な研究領域としており、特に経典、仏伝や説話類を大量に含みインド内外に広く伝播した「根本説一切有部律」とよばれる律蔵を扱ってきた。出家者たちの現実生活の諸問題に対処する律蔵と、個人の苦とそれからの解放を説く「経蔵」とがどのような相互関係のもとに成立してきたかに関心がある。学部の演習では、スリランカ、東南アジアの上座部仏教圏に仏典の言語として伝わったインドの言語であるパーリ語の文献を扱う。前半で文法を解説し、後半は経典を輪読する予定である。また駒場では他宗教との比較を通して初期経典の思想を紹介するとともに（前期）、経典から論書、文芸作品等を含むインド仏教の文献史を解説する（後期）。

以上のほかに、非常勤講師の先生方が、サンスクリット語、チベット語、漢語にもとづく多彩な講義を開講している。2022年度は馬場紀寿教授（東洋文化研究所）が「上座部仏教文献講読」（大学院と共通）、柳幹康准教授（東洋文

化研究所)が「中国禅宗概説」(大学院と共通)、鈴木健太講師が「インド大乘仏教文献講読」(大学院と共通)、崔境眞講師が「チベット仏教文献講読」(大学院と共通)、八尾史講師が「インド部派仏教文献講読」(大学院と共通)を、一色助教が高橋准教授と共同で「アビダルマ文献講読」(大学院と共通)を担当した。

なお、梶原三恵子教授(インド語インド文学専修課程)が担当するサンスクリット語文法は、本専修課程の学生のほとんどが履修する。その単位は本専修課程の特殊講義の単位にあてることができる。また、「外国語」として開講されている「チベット語(1):口語文法」「チベット語(2):文語文法」および「ヒンディー語(1)(2)」も、大乘仏教やインド哲学の研究を深める上で聴講してほしい。加えて、デジタル時代における人文学のあらたな方法を学ぶ「人文情報学概論」や「人文情報学研究」は、仏教研究が最新の人文学研究にいかにか貢献しているかを学ぶとともに、広い視野から研究の意義が見渡せるようになるだろう。

本専修課程の必修単位は40単位で、インド哲学概論・インド哲学史概説・仏教概論・比較仏教論から8単位、特殊講義12単位、演習8単位、及び卒業論文または特別演習12単位である。その他、選択が36単位で、計76単位が卒業のために必要な単位である。単位取得に当って、例えば、教養課程でサンスクリット語文法を終えた学生は、改めてその授業を取らず、サンスクリット語を用いた演習によって代用できるなど、意欲ある学生のためにさまざまな配慮がなされている。また、選択履修の36単位分は本専修課程の開講科目に限定せず、文学部で開講されている多彩な科目を、各人の興味・関心に沿って、積極的に履修し、幅広い教養を身につけることも大いに歓迎される。

本専修課程では、卒業に当って、卒業論文のほか、特別演習を選択することができる。その場合、学生はサンスクリット文献(『アビダルマ・コーシャ・パーシュヤ』『バガヴァッド・ギーター』など)や漢文文献(『大乘起信論』『八宗綱要』など)、あるいはインド思想(史)・仏教思想(史)に関わる重要な文献・研究書から、3課題(各4単位)を選んで独習し、学年末に試験を受け、合格しなければならない。大学院に進学を希望する学生は、特別演習で原典解読の基礎力を養い、進学後、修士論文の研究課題に沿った原典の読解に着手することが通例となっている。一方、卒業論文に取り組む学生も、2年間の勉学の集大成として、各自で課題を見出し、有意義な研究成果を上げ、論文と

して提出している。

本専修課程は、教養学部から進学する学生のほかに、他専修課程、他学部、あるいは他大学を卒業してから学士入学する学生も含まれ、多彩である。

卒業後は大学院に進学する学生が多いが、教職や一般企業に就職する学生もいる。最近ではマスコミ、県庁、コンサルタント会社、出版社、メーカー等に就職する学生や、芥川賞を受賞した小説家も出ている。大学院はインド語インド文学専修課程と共同で、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野を組織している。大学院の学生は若手研究者として評価されている者も多く、学部学生の学習を丁寧に補助してくれている。また大学院には、外国からの留学生も多く、文学部の中でも最も国際色が豊かな研究室の一つである。

大学院生に比して学部生の数は 10 名程度と比較的小人数ではあり、学生同士、あるいは教員と学生の関係は緊密である。毎年春には、著名寺院の見学などを含む研修旅行を行ない、また年に数回の研究例会では、先輩たちの意欲に満ちた研究発表を聞くこともできる。さらにはゼミ合宿を行っている教員もいる。

あらゆる面で昏迷の深い現代だからこそ、もう一度、人間精神の根本に立ち返り、インド思想や仏教の哲人たちの奥深いことばに静かに耳を傾けながら、現代に生きる意味をともに考え、語りあおうではないか。